

日本応用心理学会が総力をあげて送る、
現代応用心理学研究の羅針盤、学会85周年特別企画！

応用心理学 ハンドブック

日本応用心理学会

企画

応用心理学ハンドブック編集委員会

編集

藤田主一・古屋 健・角山 剛・谷口泰富・深澤伸幸

日本体育大学名誉教授

立正大学

東京未来大学

駒澤大学名誉教授

松蔭大学

編集代表

HANDBOOK OF
APPLIED
PSYCHOLOGY

応用心理学
ハンドブック

研究方法／認知／感情・情動／教育／発達／パーソナリティ／臨床／福祉／
健康／看護・医療／犯罪／社会・文化／産業／交通／災害／スポーツ



日本応用心理学会



応用心理学ハンドブック編集委員会



藤田主一
古屋 健
角山 剛
谷口泰富
深澤伸幸

福村出版

2022年9月刊行!!

定価 27,500円(本体25,000円+税)

B5判／上製・函入／858頁

ISBN978-4-571-20087-8

応用心理学の領域、
全16章(各章／総説、
+トピックス),
総計334本、858頁、
圧倒的な質感！

福村出版

刊行にあたって

『応用心理学ハンドブック』は、日本応用心理学会設立85周年記念出版として企画されました。85周年とは、当時、独立した別個の学会として活動していた関西と関東の応用心理学会が合同の大会を開催し、それ以後「日本応用心理学会」の名称を使うことになったのが、85年前の1936（昭和11）年であったことによります。また、『応用心理学事典』が2007年に刊行されてからすでに15年が経過し、その間の応用心理学の発展と進歩を踏まえて、内容のアップデートを必要とする時機とも重なっていたことが企画を後押ししました。

『応用心理学事典』の編集委員長であった岡村一成日本応用心理学会元理事長は、「刊行によせて」の中で「心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指して、広い専門領域の研究者を糾合して」設立されたのが日本応用心理学会であったしながらも、「やがて心理学が多く分野に分化して発展するようになり、（中略）今日、心理学関連の学会はゆうに40を超え、心理学の研究は細分化の傾向を強めつつ」あるという認識を示しています。つまり、心理学の研究領域が多様化し細分化していく中で、応用心理学の旗のもとに幅広い領域の研究者が集い、「社会の具体的な問題解決に資することを目指して」主要な応用領域に関する研究成果や実践を集約し社会に正しく伝えていくことは、林立する個別諸学会ではなく、日本応用心理学会にしかできない仕事となったといえます。そして、『応用心理学事典』の主要応用領域別編成という編集方針は、このハンドブックにも引き継がれています。

いまやインターネットの普及等により高度情報化が進んだことで、さまざまなメディアを通じて誰でも欲しい情報を入手できる時代になっています。しかし、それは誰もが正しい情報にアクセスできることを保証するものではありません。フェイクニュースと呼ばれるような意図的・非意図的な偽情報や誤情報、さらには悪意を秘めた誹謗中傷などが混在する膨大な情報の中から、自分に必要な情報を発見し正しく活用することは至難の業となりつつあります。根拠なき疑似科学の言説、エビデンスに基づかない心理検査や民間心理療法に関する記事など、心理学に関する情報も例外ではありません。このような時代だからこそ、情報の品質保証を行い、正しい知識を社会に伝えることは、学会が果たすべき最も重要な社会的責務であるといえます。本書では心理学の多岐にわたる応用領域における確実で信頼できる研究成果を数多く紹介しています。心理学に関心のある学生や一般読者だけでなく、応用領域の関係者や心理学の専門家にも、応用心理学の現在の正しい姿を知っていただけるものと考えています。

日本応用心理学会理事長 古屋 健

組見本

（実物の
25%）

Topic
5

バーチャルリアリティ（VR）と映像酔い

渡邊 洋

①歴史と現状

VR（Virtual Reality）とは「人工現実感」、「仮想現実」と翻訳される情報提示技術の総称であるが、原義的には計算機を使って、現実場面を「本筋的」再現する技術の総称である。「現実の本質的情報」は多種多様な要素から構成され、たとえば人間の五感すなわち視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚、さらには平衡感覚が抽出する情報が加えられる。それらがさらに細分化されることによって、従来のTVやオーディオ機器などのメディア機器がVRの要件を含む可能性もある。しかし一般に認識されているVRは、現時点では主に立体感のある映像を広い視野に与え、さらには立体的で深度感の高い音響情報を付加することで、「あたかもそこにいるかのような感覚」を与える装置、といえるだろう。

視覚情報のVRによる実現は、現在大きく分けて2つの方法で行われる。すなわち、頭部をディスプレイで覆うヘッドマウントディスプレイ（HMD）方式、あるいは空間をスクリーン等で覆いそこに映像を投影する没入型方式である（図1）。HMD方式は1960年代からすでに開発が始まり、軍事、エンターテインメント、医療等への適用が現在まで続いている。とくに近年は一般消費者が気軽に手で購入ほど低価格化、コンパクト化が実現され、2016年は「VR元年」と呼ばれるほどとなつた。

一方でVRが普及するにつれてVR酔い（Cyber Sickness）の問題がクローズアップされ、デバイスマーカー、コンソリューター等は以前に増してその対策に取り組む必要が出てきた。そのひとつのが大手HMDメーカーのOculus

社がウェブ上で公開しているOculus Best Practices Guideである。すなわちデザイナー、プログラマーによる、HMD使用時の不快感を低減するための基準規則の要約であるが、取り上げられたトピックは人間工学、視覚的心理物理学の研究者が言及してきたものとほぼ一致する点が興味深い。

②研究と動向

動画像を見るによって発生する車酔い（動描酔：Motion Sickness）と類似した不快感を映像酔い（Visually Induced Motion Sickness）と呼ぶ。VR酔いを含めた映像酔いを対象とする研究は大きいく次の3つに分類される。すなわち、①映像酔いが発生するメカニズムの解明、②酔いに開拓する快感成分の同定、③映像酔いを低減する手法の開発である。

①について、映像酔いが発生する理由として広く受け入れられているものは感觉不一致説（Reisen et al. 1975）である。すなわちVR観察時の視覚および前庭系に入力される情報が、過去の経験から予測されるものと一致しないことによって酔いが発生するとするものである。また、近年では脳機能計測技術を用いることによって脳内の特定部位が映像酔いに関与することを示す報告が集まりつつある（Miyazaki et al. 2015）。

②については、映像に含まれる運動刺激をヨコ軸、ピッチ軸、ロール軸に分解して、それぞれにおける酔いへの影響を、回転速度、周波数、振幅などの観点から明らかにする研究があげられる（Keshav et al. 2011）。他に視点の有無、ディスプレイサイズが酔いに与える影響、さらには酔いに対する性差、人種差なども研究の対象となっている。

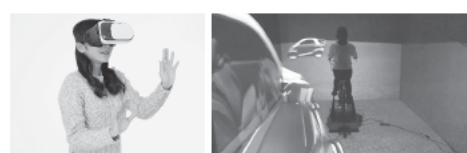


図1 HMD方式（左）と没入型方式のVR装置

ここで重要な点は酔いを評価する手法である。主観的な評価手法の中でも Kennedy et al. (1993)による Simulator Sickness Questionnaire (SSQ) は、酔いについて16の質問項目に4段階で回答することにより、吐き気（N）、眼瞼運動（O）、ふらつき感（D）、総合得点（T）に要約される条件間での比較を可能にするものとして広く流布している。ただしそれは、車で使用されるシミュレータ内での酔いを評価する目的のために書類されたデータに基づいて開拓されたものであり、現在のHMDなどVR装置使用時の評価術にそのまま適用可能かどうかは注意が必要である。一方、定量的な酔い評価の手法には自律神経系の活動状態を心拍、脈波、脳電図などを評価する方法が用いられている。簡単な手法として心拍、脈波が使われることが多いが（Sugita et al. 2008）、個人差が大きく、前述の主觀評価との対応づけが必要となる。

③については、受動的な移動場面における予告の効果が重要視されており（Watanabe et al. 2007）、移動先における加減速の予告情報あるいは位置を先導する情報、明確な直道だけでなく曲線による移動の複雑な酔いの低減に効果的であるとする報告がある。

④課題と展望

今後VRは、単なるエンターテインメントの道具から情報提示の基礎技術として多様な場面において浸透し、それに伴い経済的

な影響力をもつだろう。これを確実にするためには、大前提として安全性、快適性が確保されなければならない。そこでVRに関するものが参照できる人間工学に基づいたガイドライン策定が必要となる。筆者は同所属の浜松裕とともに2010年より国際標準機構（ISO）において「映像の生体安全性（Image Safety）」に関するワーキンググループ（ISO/TC199/SC4/WG12）を設立し、これまでに光感受性発作、立体映像による視覚疲労低減のための国際標準を発行してきた（ISO 9241-391, ISO 9241-392）。近年は映像酔い低減を目的とする国際標準の制定に携わっており（ISO/TR 9241-393, ISO 9241-394）、酔いの発生を予測する定量的指針として映像に含まれる運動量と量を提案している。

4K, 8K等の高精細度化、5G回線によるモバイル環境での動画像の視認など映像を取り巻く技術発展の結果は容易に予想される。これは同時に、予期しない生体影響が利用者に対して起きる可能性も秘めている。新しいデバイスのものとの生体影響データの蓄積、またそれに対応した低減技術の開発は基礎研究機関だけの努力では実現しない。アカデミア、デバイスマーケター、コンサルタント等、放送事業者、関係省庁などの連携が必須である。また消費者に対するPRが不快感を引き起こす可能性について情報の周知に努める必要があるだろう。安全で、楽しく、豊かな映像文化の持続・拡大を今後も期待したい。

応用心理学の過去から未来へ——本ハンドブックについて

本書『応用心理学ハンドブック』は、これまでに日本応用心理学会（以下、本学会）が培ってきた専門的知見ならびに研究成果を広く国内外へ公表し、心理学界における本学会の役割をアピールすることを目的にして、本学会企画として上梓する運びとなった。本書は、現在における本学会活動の集大成であり、今後の本学会が目指す「未来への一歩」になるものであろう。誠にうれしいかぎりである。

各章は、「総説」と「Topic」から構成される。各章の編集責任者は、それぞれのトピックを選定する作業と各トピックの執筆者の人選にあたった。本書は「ハンドブック」という特殊性から、各トピックの執筆方法が統一されていることが大切である。そこで、ひとつのトピックに本書の見開き2頁をあて、執筆者はトピックを「歴史と現状」、「研究と動向」、「課題と展望」の3項目に分けること、「研究と動向」の項目には執筆者自身を含めた最新の研究結果を挿入してもらうことになった。

編集責任者には、事情がある場合を除きできるかぎり「総説」の執筆を担当するように依頼した。「総説」は、各章の「歴史と現状」を応用心理学の観点から振り返るだけでなく、トピックの一つひとつを精読しながら、この領域の「研究と動向」、「課題と展望」をまとめていく大変な作業である。あらためて編集責任者に感謝申し上げたい。

本学会は、長い歴史の中でこれまでに数多くの書籍を上梓してきた。近くは、2007年に出版された『応用心理学事典』や2013年から2015年にかけて出版された『現代社会と応用心理学』（全7巻）がある。その時どきの研究から学界における応用心理学の立ち位置を示しつつ、その研究成果の意味と意義を広く視界に、そして社会に問うてきた。今回の本書では、古屋健本学会理事長が刊行にあたって、あえて「このような時代だからこそ、情報の品質保証を行い、正しい知識を社会に伝えることは、学会の果たすべき最も重要な社会的責務であるといえます。本書では心理学の多岐にわたる応用領域における確実で信頼できる研究成果を数多く紹介しています。応用心理学の現在の正しい姿を知っていただけるものと考えています」と、応用心理学の過去から未来に向けた研究姿勢と展望を力説している。

これらの問題提起とともに、わが国独自の文化や風習、社会性に即した応用研究を期待したい。ここに、応用心理学の原点に立ち返り、わが国の応用心理学研究として世界へ発信できることを期待するものである。

編者を代表して 藤田主一

Topic
14

自己愛傾向と反社会的パーソナリティ特性

田村敏女

① 歴史と現状

近年、ソーシャルメディアなどで取り上げられる問題のひとつに、自己愛傾向があげられる。若者のトレーリングを打たれ弱き、インターネットの普及に伴うSNSでの過剰な自己主張などの要因として、自己愛傾向が注目されることが多いのではないかだろうか。自己愛傾向の高い人に見られる利己的で自己中心的なふるまいという特徴は、社会で生活するわれわれにとって重大な問題となる。しかし、こうした特徴は自己愛傾向以外の反社会的なパーソナリティにも見られ、代表的なものにダーク・トライアド（Dark Triad）があげられる。

ダーク・トライアドは、自己愛傾向、マキャベリアニズム、サイコバシーの軽称である（Paulhus et al., 2002）。自己愛傾向とは、自己に関する苟大な感覚、特権意識。他の人の支配性、優越感の高さなどを特徴とし、DSMで定義される自己愛性パーソナリティで障害に由来する。

マキャベリアニズムは利己的、道徳感の欠如、希薄な対人感情、悲觀的個人間などを特徴とし、他人操作的な人権略に關する政治思想に由来する。サイコバシーは冷淡、利己性、衝動性、攻撃性などに特徴づけられており、もともとは収監者を対象に実験化された。先述したおり、ダーク・トライアドは、利己的で自己中心的、冷淡、他人操作的な性質などの共通した特徴を有する（Paulhus et al., 2002）。

過去20年の間に、ダーク・トライアドをはじめとして複数の類似した反社会的なパーソナリティを同時に扱う研究が急増してきた。そもそもとは異なる歴史的背景を有し、独自に研究されてきたパーソナリティ間の共通性や弁別性を

明らかにできるためである。反社会的なパーソナリティが高い人の行動は他者へ危害を及ぼしうる一方で、自分自身の社会的関係や心理的適応をも損なう（Thomaes et al., 2017）。それぞれのパーソナリティの機能や過程を正しく理解することは、反社会的なパーソナリティが高い人で社会不適応を引き起こす要因の解明や、社会的適応を改善することに貢献すると考えられる。

② 研究と動向

わが国においてもダーク・トライアドを測定する尺度は複数存在する。たとえば、田村他（2015）は、自己愛傾向、マキャベリアニズム、サイコバシーを同時に測定できるDark Triad Dirty Dozen（DTDD）（Jonason et al., 2010）を邦訳し、大学生246名を対象にDTDDの因子構造、信頼性および妥当性を検証した。

原版のDTDDを開発したJonason et al. (2010)によると、DTDDは各因子4項目で構成されるため、サイコバシーの概念を正確に反映することには限界があると考えられる。一方、少数項目で構成されながらも一定の信頼性と妥当性を有することには、項目数の制限がある調査でも有利かやすく、回答者の負担も軽減されるという点で、大規模調査や臨床場面などの有用性が高い点で注目されるだろう。

次に、実際にDTDDを使用した研究を紹介する。増井他（2018）は、DTDDを妥当性の指標に使用して、日本語版ネット荒らし尺度の開発を行った。インターネット調査会社に登録している20歳から60歳までのモニター600名を対象に、DTDDを含む反社会的なパーソナリティ、日本語版ネット荒らし尺度の共感性や攻撃性の尺度などを測定した。その結果、自己愛傾向、マキャベリアニズム、サイコバシーによる3つの因子を想定した3因子モデル、3つの因子に加えて包括的な因子も想定した階層因子モデル（図1）の適合度を比較した結果、階層因子モデルの適合度が最も良好であったことが確認された。

また、ビッグファイブ尺度との関連について

は、自己愛傾向外向性および開放性との正の相関を有し、マキャベリアニズムが協調性と負の相関を有し、サイコバシーが協調性および節制

性との負の相関を有することが示された（田村他, 2015）。この結果から、一般的な性格特徴との関連によって、3つのパーソナリティが互に関連しながらも、独自の特徴を有することが示されている。信頼性についてもサイコバシーを除くと概ね良好な内部整合性が示されている（田村他, 2015）。

3つのパーソナリティとも複雑な構造概念はあるが、とくにサイコバシーは下位因子によって不安の低さと高さの双方と関連するよう、相反する特徴を有している。DTDDは各因子4項目で構成されるため、サイコバシーの概念を正確に反映することには限界があると考えられる。一方、少数項目で構成されながらも一定の信頼性と妥当性を有することには、項目数の制限がある調査でも有利かやすく、回答者の負担も軽減されるという点で、大規模調査や臨床場面などの有用性が高い点で注目されるだろう。

次に、実際にDTDDを使用した研究を紹介する。増井他（2018）は、DTDDを妥当性の指標に使用して、日本語版ネット荒らし尺度の開発を行った。インターネット調査会社に登録している20歳から60歳までのモニター600名を対象に、DTDDを含む反社会的なパーソナリティ、日本語版ネット荒らし尺度の共感性や攻撃性の尺度などを測定した。その結果、自己愛傾向、マキャベリアニズム、サイコバシーによる3つの因子を想定した3因子モデル、3つの因子に加えて包括的な因子も想定した階層因子モデル（図1）の適合度を比較した結果、階層因子モデルの適合度が最も良好であったことが確認された。

また、Moor et al. (2019) のレビューでは、とくに、サイコバシーはネット荒らしやネットいじめな

※ 階層因子モデルは、各特性に特徴した3つのグループ因子と総合的なダーク・トライアド因子による一般因子から構成される。

図1 DTDDの因子構造（田村他, 2015）



の攻撃的なふるまいに一貫して関連する一方で、自己愛傾向やマキャベリアニズムとは、攻撃的ではないが、問題のあるインターネット利用行動（オンラインゲームやギャンブルへの依存など）と関連すると結論づけられている。インターネット上で問題行動は現代社会に特有な問題のひとつである。インターネットを介しない現実社会での問題行動とどのように異なっているのか、今後いっそう注目が集まるテーマだ。

③ 課題と展望

近年の反社会的なパーソナリティへの関心の高まりによって、それぞのパーソナリティでどのような行動の違いがあるのか、また、類似した行動の背後にどのようなメカニズムの違いがあるのか、多くの知見が蓄積つつある。しかし、Thomaes et al. (2017) で指摘されるように、反社会的なパーソナリティへの原因の高まりによって、それぞのパーソナリティでどのような行動の違いがあるのか、また、類似した行動の背後にどのようなメカニズムの違いがあるのか、多くの知見が蓄積つつある。しかし、Thomaes et al. (2017) で指摘されるように、反社会的なパーソナリティの原因や発達過程、多様なサンプルでの結果の再現性、反社会的なパーソナリティ全体としての構成概念と各パーソナリティ間の境界など、いままだ課題は残されている。加えて、インターネットの利用状況、職場や学校での生活環境といった文脈との関連をより詳細に検討することで、現実場面に即した知見が得られると期待される。

第1章 応用心理学の研究方法

服部 環 (法政大学) 編

総 説 服部 環

- Topic 1** 社交不安と注意バイアスに関する実験的検討
宮前光宏 (量子科学技術研究開発機構)
- Topic 2** 調査法を用いた職場での違反に関する研究
安達悠子 (愛知大学)
- Topic 3** 心理テスト (知能検査) を用いたアセスメント
熊谷憲子 (筑波大学)
- Topic 4** 面接法を用いたハンセン病者の家族関係に関する研究
沼山 博 (山形県立米沢栄養大学)
- Topic 5** 異文化比較研究法を用いた身体接触に関する研究
吉 美庚 (阪南大学)
- Topic 6** 実践研究に基づくSSTプログラムの開発
山本恵美子 (愛知医科大学)
- Topic 7** 質的研究法を用いた職場ストレス処理に関する研究
中村聰美 (NTT東日本関東病院)
- Topic 8** テキストマイニングを用いた特徴語と評価語の分析
小平朋江 (駒澤クリストファー大学)・いとうたけひこ (和光大学)
- Topic 9** ロジスティック回帰分析を用いた事件リンク分析
萩野谷俊平 (明治学院大学)
- Topic 10** 多重対応分析を用いた暴走族集団の特徴による類型化
小菅 律 (科学警察研究所)

- Topic 11** 多変量解析を用いた筆者識別に関する研究
関 陽子 (科学警察研究所)
- Topic 12** 媒介分析を用いた恋人支配行動の生起メカニズム
片岡 祥 (静岡福祉大学)
- Topic 13** 因子分析法を用いた完全主義尺度の作成
橋口誠志郎 (東京大学大学院)
- Topic 14** 検証的因子分析を用いた遊び体験尺度
木下雅博 (甲南大学)
- Topic 15** パス解析を用いたバーンアウトのプロセスに関する研究
松本友一郎 (中京大学)
- Topic 16** ピニエット調査を用いた心のバリアに関する研究
武藤麻美 (阪南大学)
- Topic 17** 脳波計測に基づいたケースイッチの操作性の検証
富田 新 (明星大学)
- Topic 18** レーザードップラー血流計を用いた隠匿情報検査の研究
石岡綾香 (駒澤大学非常勤講師)
- Topic 19** 眼球運動の非接触的測定による隠匿情報検査
小野洋平 (駒澤大学非常勤講師)
- Topic 20** 瞬目によるデフォルト・モード・ネットワークと注意
田中 裕 (川村学園女子大学)

第2章 認知と応用心理学 星 薫 (放送大学) 編

総 説 星 薫

- Topic 1** 視覚障害者の白杖による対象の物理的特性の認知
布川清彦 (東京国際大学)
- Topic 2** マンガの読み解きの認知心理学
和田裕一 (東北大学)
- Topic 3** 認知空間と物理空間をつなぐ写像関数について
渡辺利夫 (慶應義塾大学名誉教授)
- Topic 4** 日常場面における予期せぬ出来事の見落とし
宮崎由樹 (福山大学)
- Topic 5** バーチャルリアリティ (VR) と映像酔い
渡邊 洋 (産業技術総合研究所)
- Topic 6** 社会科学分野の誤概念
進藤聰彦 (放送大学)
- Topic 7** 緊急事態における行動メカニズムとその対処法
上田真由子 (関西国際大学)
- Topic 8** 高齢者の認知機能とうつ
小川 将 (東京都健康長寿医療センター研究所)
- Topic 9** ボディイメージの多様性と可能性
鈴木公啓 (東京未来大学)
- Topic 10** 亂数生成課題とワーキングメモリ
板垣文彦 (亜細亜大学)

- Topic 11** 目立ちやすさと顔記憶
福本純一 (前山口県警科学捜査研究所)・福田 廣 (山口大学名誉教授)
- Topic 12** フォールス・メモリ
中山友則 (実践女子大学)
- Topic 13** 「連続した」不確実事象に関する予測
村上幸史 (前関西国際大学)
- Topic 14** 目撃供述の聴取:人物同定手続きを中心に
伊東裕司 (京都女子大学)
- Topic 15** 意思決定における後悔のもつ適応的機能
上市秀雄 (筑波大学)
- Topic 16** 科学的思考研究と教育
小林寛子 (東京未来大学)
- Topic 17** オプティミズムと適応
外山美樹 (筑波大学)
- Topic 18** アスリートのポジティブ・シンキング
有富公教 (立正大学)
- Topic 19** 読解の認知プロセスとその指導
犬塚美輪 (東京学芸大学)
- Topic 20** 高齢期の認知機能低下としての認知症とその予防
鈴木宏幸 (東京都健康長寿医療センター研究所)

第3章 感情・情動と応用心理学

小林剛史 (文京学院大学) 編

総 説 小林剛史

- Topic 1** マンガに現れる感情
横田正夫 (日本大学)
- Topic 2** 生理反応に現れる感情
野瀬 出 (日本黙生命科学大学)
- Topic 3** 恋愛における感情を考える
谷口淳一 (帝塚山大学)
- Topic 4** 味嗅覚と感情機能
坂井信之 (東北大学)
- Topic 5** 動物行動における感情評価
高瀬堅吉 (中央大学)
- Topic 6** 環境の情動的評価
亀岡聖朗 (桐蔭横浜大学)
- Topic 7** 幼児教育現場における感情表出
中尾彩子 (修紅短期大学)
- Topic 8** 乳幼児期の感情発達とコミュニケーション
上村佳世子 (文京学院大学)
- Topic 9** 加齢に伴う感情反応の変化
山崎幸子 (文京学院大学)
- Topic 10** マインドフルネスと感情制御
杉山風輝子 (文京学院大学)

- Topic 11** ポジティブマインドの感情心理学
堀毛一也 (東洋大学)
- Topic 12** 自己の経験の語りと感情
文野 洋 (文京学院大学)
- Topic 13** 援助行動と感情コミュニケーション
梶原隆之 (文京学院大学)
- Topic 14** 感動体験と動機づけ
戸梶亞紀彦 (東洋大学)
- Topic 15** 笑いの生起過程:自発的笑いと意図的笑い
桐田隆博 (岩手県立大学)
- Topic 16** 怒り感情生起の過程と要因
長澤里絵 (P & E研究所)
- Topic 17** 行動分析学から見た感情
丹野貴行 (明星大学)
- Topic 18** なつかしさの感情心理学
松田 恵 (北九州市立大学)
- Topic 19** ワーク・モチベーション
大竹恵子 (京都先端科学大学)・内山伊知郎 (同志社大学)
- Topic 20** 世代間コミュニケーションと感情
大坊郁夫 (北星学園大学・同大学短期大学部)

第4章 教育と応用心理学 伊坂裕子 (日本大学) 編

総 説 伊坂裕子

- Topic 1** 教授学習
小野瀬雅人 (聖徳大学)
- Topic 2** アクションラーニングとプロセスマネジメント
伊東昌子 (成城大学経済研究所)
- Topic 3** 教育におけるICTメディアの活用
鈴木佳苗 (筑波大学)
- Topic 4** 学校における体罰の実態と体罰排除教育の実践
藤田圭一 (日本体育大学名誉教授)
- Topic 5** 高等学校・大学における特別支援と合理的な配慮
生駒 恵 (川村学園女子大学非常勤講師)
- Topic 6** キャリア教育とキャリア発達
三保紀裕 (京都先端科学大学)
- Topic 7** 社会的規範と道徳教育
高木 彩 (千葉工業大学)
- Topic 8** 情報モラル教育
坂元 章 (お茶の水女子大学)
- Topic 9** 犯罪予防のための教育
島田貴仁 (科学警察研究所)
- Topic 10** 持続可能な開発と教育
柿本敏克 (群馬大学)

- Topic 11** 家庭における食育の重要性
荒木みさこ (千葉経済大学兼任講師)
- Topic 12** 授業内問題行動 (私語、座席位置)
川西千弘 (京都光華女子大学)
- Topic 13** 学業的延引行動 (課題先延ばし行動)
龍 祐吉 (東海学園大学)
- Topic 14** 学級雰囲気といじめの関係
三島浩路 (中部大学)
- Topic 15** いじめアンケートを活用したいじめ防止
大西彩子 (甲南大学)
- Topic 16** 学校適応感を規定する要因
柏谷貴志 (奈良教育大学)
- Topic 17** スクールカウンセリングの現状とカウンセラーの役割
田名場 恵 (弘前大学)・田名場 美雪 (弘前大学)
- Topic 18** 感情教育と抑うつの関係
吉田 悟 (文教大学)
- Topic 19** 教育における自己有能感・自己肯定感の位置づけ
田中道弘 (千葉女子専門学校)
- Topic 20** 多文化共生と学校教育
古屋 健 (立正大学)

- Topic 1** 人間発達とサステナブル・ディベロップメント
荒木穂穂(立命館大学)
- Topic 2** これから生まれる命を守る: 胎生期の発達と母子支援
佐藤初美(10代・20代の妊娠SOS新宿一キッズ&ファミリー)
- Topic 3** 乳児期前半の発達と支援: 笑顔を支える保育
小倉直子(小田原短期大学)
- Topic 4** 乳児期後半の発達と支援: 主体性を育む保育
松田千都(京都文教短期大学)
- Topic 5** 1歳半の飛躍と自己認知
高木玉江(大阪健康福祉短期大学)
- Topic 6** 幼児期での自他理解の発達
寺崎美穂(市立ひらかた子ども発達支援センター)
- Topic 7** 幼児期の人格形成における自己信頼性と社会的交流活動
本原琴美(京都大学大学院)
- Topic 8** 自我・自己信頼性を尊重した保育・療育: 自閉症幼児への実践
塚田直也(筑波大学附属視覚特別支援学校)
- Topic 9** 子どもたちの発達を捉えた乳幼児健診
中村隆一(人間発達研究所)
- Topic 10** 小学生の発達と教育: 思考の深まりと人間関係
藤村宣之(東京大学)

- Topic 11** 中学生の発達と教育: 14歳、心の中に秘密の小箱
加藤聰一(大同大学)
- Topic 12** 子どもを信じることを根っこに据えた親の支援
田中茂樹(佐川川診療所)
- Topic 13** 老いて遊心: 生と死を支える心理学
張 貞京(京都文教短期大学)
- Topic 14** 運動と自己信頼性: 運動・手指操作機能の発達
横井川美佳(京都大学大学院)
- Topic 15** 赤ちゃんは世界をどう理解するか: 認知・言語機能の発達
麦谷綾子(日本女子大学)
- Topic 16** 豊かな人間関係が感情を育てる: 感情機能の発達
荒木美知子(人間発達研究所)
- Topic 17** 幼児期の自己信頼性と他者尊重性の発達連関
福田 隆(京都大学田中研究室卒業)
- Topic 18** 保育事故をどう防ぐか
平沼博将(大阪電気通信大学)・服部敬子(京都府立大学)
- Topic 19** 発達障害の理解と支援: 自閉症を中心に
赤木和重(神戸大学)・吳 文慧(神戸大学大学院)
- Topic 20** 発展途上国での障害療育: セントルシア国での医療と教育
森 由隆(セントケア東京株式会社)

第6章 パーソナリティと応用心理学 松田浩平(東北文教大学)編

総説 松田浩平

- Topic 1** 人間はパーソナリティをどのように捉えてきたか
山岡重行(聖徳大学)
- Topic 2** PAC分析: 個人別態度構造の分析
内藤哲雄(明治学院大学)
- Topic 3** 行動の抑制システムと活性化システム(BIS/BAS)
上出寛子(名古屋大学)
- Topic 4** 感情の発達と社会的知能(EQ)
齋 理津子(江戸川大学)
- Topic 5** 実験的方法によるパーソナリティの測定
佐藤恵美(東京富士大学)
- Topic 6** パーソナリティの測定と心理尺度構成
北見由奈(湘南工科大学)
- Topic 7** 社会的自己制御
原田知佳(名城大学)
- Topic 8** 性格の主要5因子
大塚一郎(帝京平成大学)
- Topic 9** 原因帰属と統制感
釣原直樹(大阪大学名誉教授)
- Topic 10** 対人行動とシャイネス
菅原健介(聖心女子大学)

- Topic 11** 性格測定における社会的望ましさの要因
河内和直(群馬医療福祉大学非常勤講師)
- Topic 12** 自己開示は何によって変わるのか
松原詩緒(岩谷学園テクノビジネス横浜保育専門学校)
- Topic 13** 向社会的行動と自己統制、役割取得
塚本伸一(東京未来大学)
- Topic 14** 自己愛傾向と反社会的パーソナリティ特性
田村紋女(人間環境大学)
- Topic 15** 社会の迷惑行動と向社会的行動
二宮克美(愛知学院大学)
- Topic 16** 産業組織風土と個人特性
尾関美喜(岡山大学)
- Topic 17** パーソナリティと職業志向性
銅直優子(流通科学大学)
- Topic 18** パーソナリティとキャリア発達
高田治樹(医療創生大学)
- Topic 19** パーソナリティと経済的信念
渡辺伸子(東北公益文科大学)
- Topic 20** 心理アセスメントとパーソナリティ
花屋道子(東北文教大学)

第7章 臨床と応用心理学 沢宮容子(筑波大学)・青木みのり(日本女子大学)・清水貴裕(東北学院大学)編

総説 青木みのり

- Topic 1** 科学者—実践家モデル
松見淳子(関西学院大学名誉教授)
- Topic 2** 生物心理社会モデル
清水貴裕(東北学院大学)
- Topic 3** 心理力動的アプローチ
杉原保史(京都大学)
- Topic 4** 認知行動療法の展開: 統一プロトコルに焦点を当てて
藤里穂子(関西大学)・宮前光宏(量子科学技術研究開発機構)
- Topic 5** 人間性アプローチ
伊藤義美(名古屋大学名誉教授)
- Topic 6** ナラティブ・アプローチに基づく心理支援
長谷川明弘(東洋英和女学院大学)
- Topic 7** 集団療法
野島一彦(九州大学名誉教授)
- Topic 8** 日本生まれの心理療法
鶴 光代(東京福祉大学)・武内智弥(聖徳大学)
- Topic 9** 動機づけ面接
沢宮容子(筑波大学)・大坪陽子(東京医科大学)
- Topic 10** 健康・医療における心理社会的課題と必要な支援
園田明人(静岡県立大学)

- Topic 11** わが国における児童虐待への対応の課題
村松健司(東京都立大学)
- Topic 12** 教育領域における心理社会的課題と必要な支援
山口豊一(聖徳大学)
- Topic 13** 司法・犯罪領域における臨床心理学の役割
細江達郎(岩手県立大学名誉教授)
- Topic 14** 産業メンタルヘルスの実践
廣山祐仁(東京海上日動メティカルサービス株式会社)
- Topic 15** 心的外傷後ストレス障害(PTSD)とその支援
藤森和美(武藏野大学)
- Topic 16** ヒューマンエラーと安全教育
深澤伸幸(松蔭大学)
- Topic 17** LGBTのメンタルヘルスとウェルビーイング
佐藤洋輔(埼玉学園大学)
- Topic 18** ポジティブボディイメージ研究の現状と展望
生田目 光(筑波大学)
- Topic 19** ポジティブ心理学における研究と実践
堀毛裕子(東北学院大学名誉教授)
- Topic 20** 臨床心理学における倫理
金沢吉展(明治学院大学)

第8章 福祉と応用心理学

総説 北川公路

- Topic 1** 母子保健と乳幼児の育ちの支援
和田佳子(聖徳大学)
- Topic 2** 保育所などにおける就学移行支援
齊藤 崇(淑徳大学)
- Topic 3** 児童福祉に関する制度および施設
平野修司(南児童相談所)
- Topic 4** 視覚障害児・者の理解と支援
野川由紀(帝京大学)
- Topic 5** 聴覚障害児・者の理解と支援
勝谷紀子(東京大学)
- Topic 6** 知的障害児・者の理解と支援
佐藤佑貴(福島学院大学)
- Topic 7** ひきこもりの実態と支援の方向性
神澤 創(いこまカウンセリングルームこころ)
- Topic 8** 犯罪者への理解と支援
碓井真史(新潟県立大学)
- Topic 9** 発達障害者家族への支援
鳥森武夫(仙台市北部発達相談支援センター)
- Topic 10** 配偶者からの暴力被害者とその支援
米田弘枝(前立正大学)

- Topic 11** 離婚後の親と子どもへの理解と支援
小田切紀子(東京国際大学)
- Topic 12** 高齢者の就業・退職
杉澤秀博(桜美林大学)
- Topic 13** 高齢者の社会的孤独
安藤孝敏(横浜国立大学)
- Topic 14** 高齢者の社会参加の精神健康状態への効果について
吉田裕人(東北文化学園大学)
- Topic 15** 認知症高齢者への対応に関する予防的アプローチ
佐伯典彦(居宅介護支援事業所ハッピーワード)
- Topic 16** 介護人材に関する社会的認識
南條正人(仙台大学)
- Topic 17** 認知症カフェ: 日本における認知症ケアの実践と展開
小野寺敦志(国際医療福祉大学)
- Topic 18** 認知症の人の家族支援
矢吹知之(東北福祉大学、認知症介護研究・研修仙台センター)
- Topic 19** 人生100年時代の応用心理学の役割
権藤恭之(大阪大学)

- Topic 1** 主観的ウェルビーイング
角野善司 (高崎健康福祉大学)
- Topic 2** ストレスと感情
余語真夫 (同志社大学)
- Topic 3** コーピング・スキルとストレス反応
木島恒一 (前北陸学院大学)
- Topic 4** 過剰適応と健康
水澤慶緒里 (同志社女子大学非常勤講師)
- Topic 5** 臓器移植と臓器提供
今野 順 (愛媛大学)
- Topic 6** ADHD傾向と対人関係
大久保範一郎 (京都橘大学)
- Topic 7** 認知症患者の行動
上野萌子 (同志社大学)
- Topic 8** 服薬へのかかわりについて
荒木晴海 (アビリティーズ・ケアネット株式会社)
- Topic 9** 妊娠・出産をめぐる女性の心理
河野千佳 (日本大学)
- Topic 10** 喫煙行動と健康
岸 太一 (京都橘大学)

- Topic 11** 飲酒行動と健康
福田大祐 (常磐大学)
- Topic 12** 食の多様化・外部化と家庭での食行動
平田裕美 (女子栄養大学)
- Topic 13** 肩こりとリラクゼーション
内田誠也 (MOA健康科学センター)
- Topic 14** 癒し評価尺度の開発
松本 洋 (前日本大学)
- Topic 15** 音楽の癒し : 音楽療法
小島寿子 (親子サポートセンター)
- Topic 16** リハビリテーションと応用心理学
大桐 將 (山田整形外科病院)
- Topic 17** 坐禅・瞑想と健康
加藤博己 (駒澤大学非常勤講師)
- Topic 18** 笑いと健康
森田亜矢子 (関西大学)
- Topic 19** 相補代替医療 : 統合医療
田中英明 (MOA健康科学センター)
- Topic 20** 心理学における日本人の死生観
伊波和恵 (東京富士大学)

第10章 看護・医療と応用心理学 川本利恵子 (湘南医療大学)・山中 真 (愛知医科大学) 編

- Topic 1** 看護心理学のすすめと可能性
増田匡裕 (和歌山県立医科大学)
- Topic 2** ケアの本質と援助的人間関係
森田敏子 (前徳島文理大学)
- Topic 3** 生命の危機的状況における患者・家族の心理とケア
黒澤昌洋 (愛知医科大学)
- Topic 4** 災害とこころの健康
今留 忍 (東京家政大学)・谷岸悦子 (東京家政大学)
- Topic 5** 発達 : 子どもの眠りと生体リズムから見た心身健康
新小田春美 (福岡女学院看護大学)
- Topic 6** 言葉の喪失 : 喉頭全摘出者の声の喪失を中心
小竹久実子 (奈良県立医科大学)
- Topic 7** 大腸がん患者の喪失と変化 (機能およびQOL)
木下由美子 (宮崎大学)
- Topic 8** 乳がん手術を受けた患者の乳房喪失に対する支援
金岡麻希 (宮崎大学)
- Topic 9** 高齢者および障害者等への就労支援
山田 忍 (和歌山県立医科大学)
- Topic 10** 喪失 : がん患者の家族の喪失体験 (悲しみに寄り添う)
安藤詳子 (一宮研伸大学)

- Topic 11** 緩和ケアの広がり
長 聰子 (産業医科大学)
- Topic 12** 意思決定支援とアドバンス・ケア・プランニング
宮園真美 (福岡看護大学)
- Topic 13** 妊娠と仕事におけるストレス状況
阿南あゆみ (産業医科大学)
- Topic 14** 看護医療場面におけるハラスメント
山本勝則 (天使大学)
- Topic 15** 看護医療現場における暴力 : 支援者への攻撃
前野有佳里 (九州大学)
- Topic 16** チーム医療、連携協働するためのコミュニケーション
豊福佳代 (福岡女学院看護大学)
- Topic 17** リスクマネジメント (医療安全)
五十嵐 博 (群馬県立県民健康科学大学)
- Topic 18** 専門職における人材育成
竹内久美子 (和洋女子大学)
- Topic 19** 学習スキルと看護実践能力評価
蒲生澄美子 (埼玉医科大学短期大学)
- Topic 20** 看護分野における計測機器活用の可能性
山中 真 (愛知医科大学)

第11章 犯罪と応用心理学 桐生正幸 (東洋大学) 編

- Topic 1** 地域防犯活動の実際と研究
長澤秀利 (岩手県警察本部)
- Topic 2** 裁判員裁判
板山 昂 (関西国際大学)
- Topic 3** 110番通報
豊沢純子 (大阪教育大学)
- Topic 4** 性犯罪の実態と研究
田口真二 (久留米大学非常勤講師)
- Topic 5** 情状鑑定
岡本吉生 (日本女子大学)
- Topic 6** 「法と心理学」の研究
綿村英一郎 (大阪大学)
- Topic 7** 逸脱行動とジェンダー
倉矢 匠 (上智大学非常勤講師)
- Topic 8** 交通犯罪へのアプローチ
小嶋理江 (名古屋大学)
- Topic 9** テロ・ハイジャック
入山 茂 (東洋大学大学院)
- Topic 10** 保険金詐欺
阿部光弘 (三井住友海上火災保険株式会社)

- Topic 11** 現代の少年犯罪
川邊 譲 (駿河台大学)
- Topic 12** 欺瞞探知と疑わしさ
瀧口雄太 (金沢大学)
- Topic 13** ポリグラフ検査 : 何が明らかにされるのか
尾藤昭夫 (東洋大学)
- Topic 14** ポリグラフ検査 : 質問呈示法について
鈴部幸浩 (湘南医療大学)
- Topic 15** 捜査心理学の現在
越智啓太 (法政大学)
- Topic 16** 犯罪者プロファイリング : 歴史的背景
横井幸久 (愛知県警察本部)
- Topic 17** 犯罪者プロファイリング : 活用例
岩見広一 (北海道警察本部)
- Topic 18** ポリグラフ検査 : テロとSCIT
中山 誠 (関西国際大学)
- Topic 19** 犯罪心理学における実験手続き
福島由衣 (日本大学)
- Topic 20** 防犯・規範意識における妖怪
高橋綾子 (東洋大学大学院)

第12章 社会・文化と応用心理学 西田公昭 (立正大学) 編

- Topic 1** 自己制御のプロセスと現実応用
下田麻衣 (京都ノートルダム女子大学)
- Topic 2** コミュニケーションスキル
磯 友輝子 (東京未来大学)
- Topic 3** ステレオタイプと偏見
上瀬由美子 (立正大学)
- Topic 4** 状況即応の自己呈示
笠置 遊 (立正大学)
- Topic 5** ソーシャルサポートとソーシャルキャピタル
福岡欣治 (川崎医療福祉大学)
- Topic 6** CMC利用と生活改善
桂 瑠以 (川村学園女子大学)
- Topic 7** デジタルゲームを活用した社会性の育成
田島 祥 (東海大学)
- Topic 8** メディアと情報リテラシー
高比良美詠子 (立正大学)
- Topic 9** 親密な関係の形成 : スピードデータティングによる検討
西村太志 (広島国際大学)
- Topic 10** 育児ストress対処の支援
古谷嘉一郎 (北海学園大学)

- Topic 11** 文化差の心理発達
鳥山理恵 (東京大学)
- Topic 12** 自殺予防の社会心理
相羽美幸 (東洋学園大学)
- Topic 13** 外見心理の自己呈示
九島紀子 (日本 顔・印象コンサルティング協会)
- Topic 14** 集団間紛争とテロリズム
繩田健悟 (福岡大学)
- Topic 15** 広告と消費者行動の心理
八木善彦 (立正大学)
- Topic 16** 消費者保護の心理
秋山 学 (神戸女子大学)
- Topic 17** 行政―市民間関係の社会心理
高橋尚也 (立正大学)
- Topic 18** 内部告発行動の社会心理
王 晋民 (千葉科学大学)
- Topic 19** カルト問題とその心理学的対処
太刀掛俊之 (大阪大学)
- Topic 20** 実証的宗教心理学と日本人の宗教性
松島公望 (東京大学)

- Topic 1 採用選考**
竹内倫和 (学習院大学)
- Topic 2 人事評価・コンピテンシー**
加藤恭子 (日本大学)
- Topic 3 分散型リーダーシップ**
坂田桐子 (広島大学)
- Topic 4 ワーク・モチベーションとその伝播**
菊入みゆき (明星大学)
- Topic 5 コミットメント**
太田さつき (静岡産業大学)
- Topic 6 コミュニケーション**
関口和代 (東京経済大学)
- Topic 7 組織市民行動・革新的行動**
高石光一 (亜細亜大学)
- Topic 8 ワーク・ライフ・バランスとディーセント・ワーク**
小野公一 (亜細亜大学名誉教授)
- Topic 9 職場のダイバーシティとステレオタイプ的認知**
山本真菜 (日本大学)
- Topic 10 キャリア発達・能力開発**
河田美智子 (株式会社日本能率協会マネジメントセンター)

- Topic 11 管理職の経験学習**
堀尾志保 (株式会社日本能率協会マネジメントセンター)
- Topic 12 職場のハラスメント**
小林敦子 (川崎市男女共同参画審議会)
- Topic 13 組織風土とメンタルヘルス**
外島 裕 (日本大学名誉教授)
- Topic 14 感情労働とバーンアウト**
増田真也 (慶應義塾大学)
- Topic 15 高業績人的資源管理システム**
竹内規彦 (早稲田大学)
- Topic 16 職場における反社会的行動**
田中堅一郎 (日本大学)
- Topic 17 安全衛生：労働者の安全と健康**
細田 聰 (関東学院大学)
- Topic 18 働く人を支えるカウンセリング**
道谷里英 (順天堂大学)
- Topic 19 広告融合型コンテンツ**
山下玲子 (東京経済大学)
- Topic 20 消費者行動と進化心理学**
井上裕珠 (日本大学)

第14章 交通と応用心理学

臼井伸之介 (西日本旅客鉄道株式会社安全研究所)・中井 宏 (大阪大学) 編

総 説 中井 宏
臼井伸之介

- Topic 1 高齢運転者の認知機能と運転**
蓮花一己 (帝塚山大学)
- Topic 2 高齢者の運転回避・運転停止**
太子のそみ (日本学術振興会)
- Topic 3 交通違反とリスク・ベネフィットの認知との関係**
森泉慎吾 (帝塚山大学)
- Topic 4 社会規範からの逸脱と厳罰化**
北折充隆 (金城学院大学)
- Topic 5 アクセルとブレーキの踏み間違い**
矢野伸裕 (科学警察研究所)
- Topic 6 発達障害と交通安全 (交通事故防止)**
小菅英恵 (交通事故総合分析センター)
- Topic 7 歩行者・自転車の安全**
神田直弥 (東北公益文科大学)
- Topic 8 アルコール・薬物使用と交通安全**
岡村和子 (科学警察研究所)
- Topic 9 運転支援・自動運転に関する心理学的課題**
篠原一光 (大阪大学)
- Topic 10 職業運転者：疲労運転の防止研究**
北島洋樹 (大原記念労働科学研究所)

- Topic 11 IT機器を用いた危険予測訓練**
高橋明子 (労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所)
- Topic 12 発達段階に応じた子どもの交通安全教育**
大谷 亮 (日本自動車研究所)
- Topic 13 交通事故統計データを用いた事故分析**
松浦常夫 (実践女子大学)
- Topic 14 運転再教育における運転技能評価**
多田昌裕 (近畿大学)
- Topic 15 臨機応変な対応力を高めるイメージトレーニング**
楠神 健 (東日本旅客鉄道株式会社JR東日本研究開発センター)
- Topic 16 鉄道の安全：踏切事故防止研究**
和田一成 (西日本旅客鉄道株式会社安全研究所)
- Topic 17 航空の安全：パイロットのワークロード評価**
廣島克佳 (前航空自衛隊)
- Topic 18 船舶の安全：海上交通における避航操船**
測 真輝 (神戸大学)
- Topic 19 交通事故被害者の支援**
藤田悟郎 (科学警察研究所)
- Topic 20 運転者の不安全行動と運転適性検査活用の可能性**
吉野 裕 (神奈川県警察本部)

第15章 災害と応用心理学

申 紅仙 (常磐大学) 編

総 説 申 紅仙

- Topic 1 災害と原子力不安**
辻川典文 (神戸親和女子大学)
- Topic 2 災害時の募金**
山本陽一 (明星大学非常勤講師)
- Topic 3 自然災害被災者の長期的な精神健康**
大森哲至 (帝京大学)
- Topic 4 自然災害と効果的な防災教育**
島崎 敏 (近畿大学)
- Topic 5 防災に向けた企業の取り組み**
余村朋樹 (大原記念労働科学研究所)
- Topic 6 災害時における消費者の買いだめ行動**
花尾由香里 (東京富士大学)
- Topic 7 災害とリスク認知**
松井裕子 (株式会社原子力安全システム研究所)
- Topic 8 医療と災害：レジリエンスについて**
加藤美沙子 (秋田大学医学部附属病院)
- Topic 9 慢性ストレス：わが国の消防を中心に**
田之内厚三 (麻布大学名誉教授)
- Topic 10 災害リスクコミュニケーション**
稻葉 緑 (情報セキュリティ大学院大学)

- Topic 11 災害におけるビッグデータへの心理学的アプローチ**
鈴木忠雄 (福島学院大学短期大学部)
- Topic 12 防災とユーザーインターフェイス**
藤掛和広 (中央大学)
- Topic 13 災害心理と科学コミュニケーション**
山田泰行 (順天堂大学)
- Topic 14 自然災害と海上交通の安全確保**
吉村健志 (海上・港湾・航空技術研究所)
- Topic 15 学校における防災教育**
堀 洋元 (大妻女子大学)
- Topic 16 災害と避難行動**
清水 裕 (昭和女子大学)
- Topic 17 超急性期災害医療の複雑性と不確実性に対処する**
庄司直人 (朝日大学)
- Topic 18 被災自治体職員の惨事ストレス**
高橋幸子 (玉川大学非常勤講師)
- Topic 19 航空機事故遺族の心理**
安藤清志 (東洋大学)
- Topic 20 日本における防災の実態と防災関与の研究**
静間健人 (東日本大震災・原子力災害伝承館)・土田昭司 (関西大学)

第16章 スポーツと応用心理学

三村 覚 (大阪産業大学) 編

総 説 三村 覚

- Topic 1 オリンピックでの心理サポート**
立谷泰久 (国立スポーツ科学センター)
- Topic 2 スポーツメンタルトレーニング**
平山浩輔 (帝京平成大学)
- Topic 3 スポーツカウンセリング**
種ヶ嶋尚志 (日本大学)
- Topic 4 受傷アスリートに対する心理サポート**
平木貴子 (日本大学)
- Topic 5 チームビルディング**
秋葉茂季 (国士館大学)
- Topic 6 知的障害者柔道の可能性**
森脇保彦 (国士館大学)・徳安秀正 (東京有明医療大学)
- Topic 7 パラアスリートに対する心理サポート**
高井秀明 (日本体育大学)
- Topic 8 スポーツとライフスキル**
荒井弘和 (法政大学)・清水智弘 (日本スポーツ振興センター)
- Topic 9 口コモティブシンドロームと多面的対策**
大槻伸吾 (大阪産業大学)
- Topic 10 特定健診・特定保健指導と運動指導の心理学**
本多麻子 (東京成徳大学)

- Topic 11 運動学習：運動技能の習得とその指導**
園部 豊 (帝京平成大学)
- Topic 12 スポーツと動機づけ**
深見将志 (日本大学)
- Topic 13 スポーツで用いられる心理検査**
佐々木史之 (環太平洋大学)
- Topic 14 運動部活動と心理**
来田宣幸 (京都工芸繊維大学)
- Topic 15 体育授業の心理**
續木智彦 (西南学院大学)
- Topic 16 スポーツ指導者の心理**
村上貴聰 (東京理科大学)
- Topic 17 子どもの運動遊びの指導**
河田聖良 (日本体育大学)
- Topic 18 障害児・者の体育・スポーツ**
鈴木悠介 (東京都立高島特別支援学校)
- Topic 19 武道における心理学**
藤本太陽 (福山平成大学)

応用心理学研究総覧

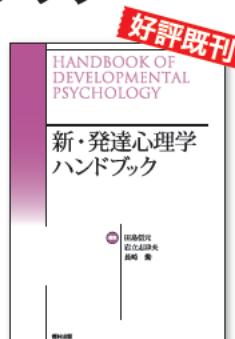
- ・中心的テーマとして16の領域・分野【研究方法／認知／感情・情動／教育／発達／パーソナリティ／臨床／福祉／健康／看護・医療／犯罪／社会・文化／産業／交通／災害／スポーツ】からホットなトピックをとりあげ（1章20トピック），今どんな研究がその分野でなされているのか，関連する研究の歴史的背景，最新の動向，今後の課題と展望がわかる応用心理学研究の一大リファレンス。
- ・各章の研究の現在地が俯瞰できる総説付き。
- ・研究のヒントが満載。ベテランから若手まで幅広く活用できる100%丸ごと応用心理学が詰まった新しいハンドブック。
- ・心理学研究者，関連領域・分野の研究者，大学院生必読必備の図書。

新・発達心理学ハンドブック

田島信元，岩立志津夫，長崎 勤 編集

■B5判／上製・函入／1004頁
定価**33,000円**（本体30,000円+税）

1992年に刊行された旧版の枠組みを継承しつつ、前書刊行から20余年の間に展開された研究動向をふまえて、新設章ならびに改変を加え、新たな情報・知見を盛り込んだ刷新版。

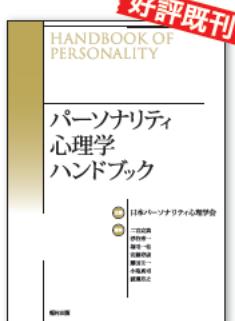


パーソナリティ心理学ハンドブック

日本パーソナリティ心理学会 企画
二宮克美，浮谷秀一，堀毛一也，
安藤寿康，藤田主一，小塩真司，
渡邊芳之 編集

■B5判／上製・函入／780頁
定価**28,600円**（本体26,000円+税）

歴史や諸理論など総論から各ライフステージの諸問題、障害や問題行動、健康やポジティブ感情・特性、社会と文化、測定法や統計的分析など多岐にわたる項目を網羅した決定版。

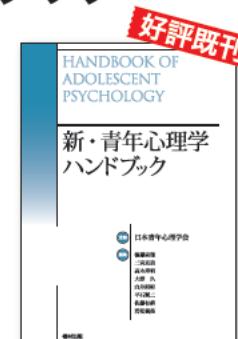


新・青年心理学ハンドブック

日本青年心理学会 企画
後藤宗理，二宮克美，高木秀明，
大野 久，白井利明，平石賢二，
佐藤有耕，若松養亮 編集

■B5判／上製・函入／726頁
定価**27,500円**（本体25,000円+税）

1988年刊行の『青年心理学ハンドブック』から25年。青年を取り巻く状況の変化を俯瞰しながら研究の動向と課題を今日的なトピックを交えて論説。研究者必備の基本図書。

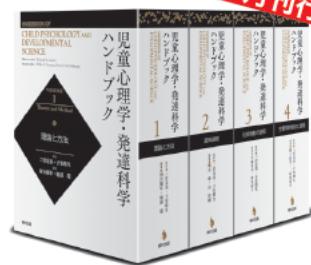


児童心理学・発達科学ハンドブック

リチャード・M・ラーナー 編集主幹
二宮克美，子安増生 監訳
河合優年，服部 環，郷式 徹，
山 祐嗣，小塩真司，仲 真紀子，
根ヶ山光一，氏家達夫 編訳

【全4巻 [8冊] +別冊／分売不可】
■B5判／上製・函入／総6068頁
定価**220,000円**（本体200,000円+税）

最新の知見を、総勢117人の発達心理学や関連領域の専門家が翻訳（4巻全88章）。研究者必携の基本図書。



福村出版 | 〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11 <https://www.fukumura.co.jp> TEL 03-5812-9702 FAX 03-5812-9705

応用心理学ハンドブック

◎定価**27,500円**（本体25,000円+税） ISBN978-4-571-20087-8

部 注文します

注文書
既刊

◆福村出版

新・発達心理学ハンドブック

◎定価**33,000円**（本体30,000円+税） ISBN978-4-571-23054-7

部 注文します

取扱い書店

新・青年心理学ハンドブック

◎定価**27,500円**（本体25,000円+税） ISBN978-4-571-23051-6

部 注文します

パーソナリティ心理学ハンドブック

◎定価**28,600円**（本体26,000円+税） ISBN978-4-571-24049-2

部 注文します

児童心理学・発達科学ハンドブック

◎定価**220,000円**（本体200,000円+税） ISBN978-4-571-23510-8

部 注文します

お名前

ご住所 (〒 - - -)

お電話番号